

井戸から考察する漢字「井戸」 —オノマトペとしての「井」と願文石—

本 間 光 徳

【要旨】

井戸は一般的に地下より水を汲む穴及びその付帯設備と考えられ、考古学的にその起源は弥生時代とされている。しかし、日本史学者・秋田裕毅は縄文時代に掘削された土坑にその起源を求め、カミの通路或いはカミへ供え物をした穴としている。筆者は、井戸の「戸」に「棲家」の意味がある点に注目し、東京都青梅市所在の古井戸から出土した願文石は井戸に住むカミへの祈願が込められた祭祀性ある石であると解釈する。また、「井」の正字「井」の最終画の「丶」には、「釣瓶」説、「水」説、「かめ」説、「空間」説、「首」説と諸説ある中、筆者は国字「井」に注目する。即ち、「井」から「井」への変化を経た漢字が「キド」の「キ」に当てられ、「井」が涸れる危機に際し、願文石のような祭祀性のある物体が井戸内部に設置された。それが字形「井」でありオノマトペ「ドン」であるとする。井戸は、祭祀性を帯びた土坑として発生し、「あど」を経て、水を得る設備・施設へと発展したものである。然らば、水を得る設備と認識されるようになった後も、そこがカミの居場所と考えられ、祈願されたのは自然の行為と言えよう。

【キーワード】

井戸、オノマトペ、漢字、願文石、祭祀

1 はじめに

日本研究センター（以下、センター）では日本語の授業の他に歴史や文化の科目を提供しているのみならず、3～4 学期には学生の専門性に応じた科目を提供している。歴史学はそのひとつであり、授業範囲は近世から戦後史にまで及ぶ。

日本語の科目に於いては、高度な日本語技術の習得を目的としたインタビュー教材として、教職員各々個性的なインタビュー動画を作成したのであるが、そこで筆者は自身の研究で扱う井戸について語ったことに加え、本年度の歴史学では、井戸に言及した文献を扱った¹。また、本稿執筆中のセンター2021 年度の統合日本語に於いて、東京都指定文化財旧吉野家住宅並びに敷地内に現存する井戸を教材として扱った。万人に必要な不可欠な水を得る為の井戸の歴史は人類史そのものと言え、そこからは農業のみならず、工業、商業、政治、宗教、文学、あらゆる文化が発生している。従って、井戸は多様な研究者に対し共通の研究材料となりうると共に、共通の言語、文化学習の教材として適しているのだ

る。

本稿は、そのような教材の実現に向けての第一歩として、筆者のこれまでの井戸に関する研究をまとめた。

2 「井戸」の定義

現代の日本では、飲用水を得る目的で使用される設備としての井戸は水道にその座を譲って久しい。しかし、1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災を契機に井戸は非常用施設として注目を集めている。例えば、センターが所在する横浜市に於いても災害応急用井戸として2,014の井戸施設が登録されており²、同市金沢区の小学校内には自然教育目的の井戸も新設されている³。井戸は一見時代遅れの給水設備のようであるが、震災による水道管の破損や電力停止等の影響を受けず、災害応急施設として有力なものである⁴。

ところで、井戸を思い浮かべよと言われたら、如何なるものを想起されるであろうか。滑車に釣瓶が下がった車井戸だろうか⁵、或いは鋳物の手動ポンプで水を汲み上げるものか⁶、はたまた農業や融雪用に電動ポンプを接続した日常的な設備を思い浮かべられるかも知れない。

しかし、井戸には他に様々な形態がある。井戸は構造から大別すると、水平井戸と垂直井戸に別けられる。例えば、崖面の横穴から湧水を得る「横井戸」は水平井戸の一種である(写真1、2)。

一般的な井戸イメージは垂直井戸であろう。初期的垂直井戸の一種に、大型複合形状井戸として漏斗状・すり鉢状の降り井(下り井戸)がある。降り井は、一定の深度まで人が歩き下り、下り切った地点で揚水する井戸で、地質が脆く鑿井し難い地域に見られる形状である(写真3)。掘り難い井戸、藤原俊成や紀貫之が詠んだ「堀兼の井」はそれに当たると思われる⁷。

様々な形状の井戸から揚水する為には(滑車)釣瓶のほか、振り釣瓶や竿釣瓶、撥ね釣瓶等様々な釣瓶が使用された⁸。また、自然に地下水が噴出し溢れ出ている井戸を自噴井戸と言い、基本的に揚水設備は無い。



写真1. 横井戸
地蔵院の「横井戸」
(2021.6.1.筆者撮影)



写真2. 「横井戸」内部
(2021.6.1.筆者撮影)



写真3. 降り井
五ノ神まいまいず井戸
(2019.7.31 筆者撮影)

『広辞苑』は「井戸」を定義し、「①用水を得るために、地を掘って地下水を吸い上げ、または汲みとるようにしたもの。→井。②井戸茶碗の略」と書いている⁹。講談社『国語大辞典』には「地下水をくみ上げるために掘った深い穴。また、そのためにつける装置」とあり、穴と装置の両方が「井戸」と呼称されることが説明されている¹⁰。他の国語事典も概ね当該二書と同様、また、角川『古語大辞典』も同様の記述を載せている¹¹。つまり、辞書上の定義では、井戸とは地下水を得る目的の穴と装置のことである。

では、考古学上「井戸」は如何に定義されているだろうか。考古学では、縄文時代には井戸はなかったとされ、その定義は「地面を湧水層まで掘削し、地下水を獲得するための人工的な土坑（穴）、つまりは豎掘り井戸」となっており¹²、弥生時代中期中葉以降に造られたものを指している。

秋田裕毅は井戸の祭祀性を指摘するとともに、井戸とは土坑の内、「たまたま地下水面まで掘られた深いもの」と書き、弥生時代に突然井戸が出現したとする考古学上の説の説得力に疑問を呈している¹³。しかし、湧水層まで達する深度を有する人工的な土坑を指し「井戸」と称する点は考古学上の共通認識であり、相違点は地下水を獲得するという目的を本来的に有したか否かという点である。語源辞典で調査するに、解説には多少の相違が認められるものの、「水を汲む設備」という点に於いては異口同音である。『井戸の研究』で著名な考古学者・山本博は、井戸を「水をためる施設」とし、地上施設を井桁、地下施設を井筒と呼び分けつつも、「『井戸』は常用語であり普及語でもあるから」それらを総括して井戸と呼称することに同意している¹⁴。

井戸水は一般的に汲み上げて使用されるが、汲み上げる前に井底の水溜り或いは井筒内に溜まっていることが前提であるから、水を「汲む施設」、「ためる施設」、どちらも正しく、厳密には「溜めて汲む施設」と言える。しかし、それとは逆に、水を地下に戻す為の

井戸、即ち液体を地下に浸透させる目的の「吸い込み井戸」等も存在することから、井戸を包括的に定義する場合は、一旦「ためる」が適当である。また、江戸時代前期には江戸市中に総延長 150km に及ぶ木製水道管が敷設され、水道水を汲み上げる上水井戸が各所に設置されていた事実があり¹⁵、井戸は地下水に限らず上水を溜める施設でもあった¹⁶。現代に於いても「三宅島の人たちは雨水タンクを井戸と呼んでいる」事実は¹⁷、井戸が水を「溜める」為のものと認識された左証である。従って、一般語としては、増井金典の「現代語では、地下水をくみあげやすくしたところ」という定義が、専ら水道が使用される現代に妥当である¹⁸。増井が「ところ」と書くよう、「井戸」は設備であると同時に場所を示すと理解して良い。本稿に於いても一般語としての「井戸」を使用しつつ、各部位についてはそれが明確になるよう説明的な言及に努めたい¹⁹。

3 文献上の井戸

現代語で言うところの、日本の「井戸」の歴史はどこまで遡れるであろうか。既に山本博が『井戸の研究』に於いて「文献上の井戸」を紹介している為²⁰、本稿では簡単に触れるにとどめる。

井戸は記紀に既に登場している。例えば、『古事記』では土着神の井氷鹿（いひか）や伊邪那美の子の弥都波能売神（みずはのめかみ、日本書紀では罔象女神・巖罔女神）が井戸の神である。また、『日本書紀』の雄略天皇紀一即位前には以下のように三輪の磐井が登場している。

是月、御馬皇子、以曾善三輪君身狭故思欲遣慮而往。不意、道逢邀軍、於三輪磐井側逆戰、不久被捉。臨刑、指井而詛曰「此水者百姓唯得飲焉、王者獨不能飲矣。」²¹

文意は凡そ以下の通りである。即ち、ミマノミコはミワノミキムサが良いと思っていたので、その考えを伝えに行った。ところが反対勢力の軍に会い、三輪の磐井のほとりで戦闘になり、間もなく捉えられた。ミコは刑に臨んで、井戸を指差し呪って「この水は百姓だけが飲むことができ、王者はひとり飲むことができない」と言った。

日本文学者・三浦佑之は『古事記』の完成を7世紀後半以前としており、また『日本書紀』の完成年は720（養老4）年とされる²²。後者には上述のように飲用の取水施設としての井戸に関する記述が既に認められるのである。

しかしながら、ここで留意しておきたい点は特定の井戸の名称として「～井」が認められるも、井戸の「戸」に関する記述は管見では無い。

尚、井戸跡からの出土遺物に「井」や「神」等の墨書が認められることがあり、近年井戸研究に於いても文献史学と考古学の双方からの研究が著しい。

4 漢字からの考察

4-1 井

漢字「井」（い、呉音：シャウ [ショウ]、漢音：セイ）。加納喜光『漢字語源語義辞典』はその語源を「コアイメージ」として「（水が）澄み切る」とし、また「実現される意味」として「井戸」とし、「青・清・静などと同源」と説明している²³。

山本博は中国に於ける呼称を「説文」をはじめとした古典を引用し、「井」は井字型に区画した耕地を示し、その中央には灌漑用の井戸があったと書いている。また、山本は井戸を意味する漢字が「中国の文献では『井』の一字である」と指摘し、『「井戸」はわが国に起源があるようである』と書いている²⁴。

絵図として日本の井戸が描かれた最古の史料は平安時代末期の成立と推定される扇面古写経と思われる、国宝指定の四天王寺伝来品では池状の井戸が確認でき、他の模本では地上の井戸側と井桁状に組まれた上部の枠が確認できる²⁵。しかし、徐光啓が明代に編纂した『農政全書』では「水井」に井桁状の構造物は確認できない（図1）。1712年成立の寺島良安『和漢三才圖會』に於いても「井」として円形の穴が描かれており、その円周の地表部には石がめぐらされ、穴の内部壁面には縦板が見え筒状井壁（井筒）が構成されているようである（図2、右）。

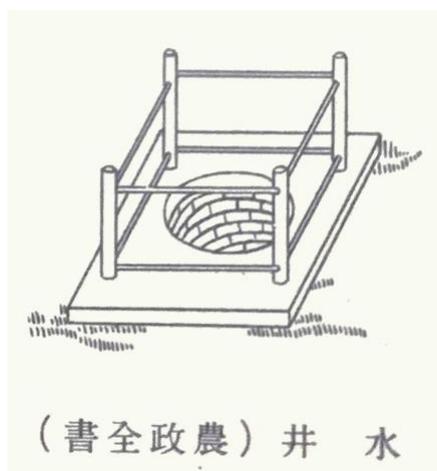


図1. 「水井」

出典：諸橋轍次(1957)『大漢和辞典
(巻五)』大修館書店 p.519



図2. 「井」、「幹」

出典：寺島良安(1970)『和漢三才圖會
(下)』東京美術 p.628、p.629

前章で引用したよう、日本に於ける最も古い文献上の井戸は漢字で表記されており、「井」と「井戸」は同義である²⁶。増井は「小川の水を少し居させて汲みやすくした所が語源でワ行のキド（あど）と書きました」と書き²⁷、各語源辞書も同様の説を記載してい

る。即ち「井」の第一義として「集ル」が挙げられ、その意味として「集る」と「居る」が、第二義として「堰門」が挙げられている²⁸。

弥生時代には既に存在が確認され、秋田がその出現を縄文時代とする土坑がいつから、また如何様なものが「井ド」と呼称されたのかは不明であるが、それらみどの内飲用水を汲む為の土坑や小川の水の「み」る所は、記紀が成立する奈良時代以前に、漢字では「井」が既に当てられていたであろう。

漢字「井」は井桁から創造された象形文字と理解され、『大字典』でも「みどの貌に象る」「井はみげた」とされている²⁹。ここで言う井桁とは、角棒状の木材や石材を井字形に組んだ構造物（井字形井桁）で、地下井戸内部に設置されたり、井筒や井戸側の上部に設置されるものである³⁰。井桁を坑の開口部に設置することにより、人等の坑への転落防止の他、蓋と共に井戸内への異物混入や汚水流入を防止することができるのである。

「井」の正字は「井」で、『篆書字典：説文解字』は「井」の中央部に「・」を書いた文字を紹介している³¹。然らば、象形文字として井桁に囲まれた中央部の「・」は何を示唆するのであろうか。『和漢三才圖會』をはじめ多くの辞書・事典類が『説文』に拠り「・」を「つるべ」としているところであるが、加納喜光や藤堂明保は「水」としている³²。また、尾崎雄二郎他編『大字典』は釣瓶説を否定し、「中空の意」としている³³。鎌田正／米山寅次郎『新漢語林』は「井」の解字を「いげたの中に『かめ』または水のある形」とした上で、「日本では、井戸に物を投げたさまから、どぶん・どんぶり」と書いている³⁴。

もし、中国古典に於ける用例のように、「井」が井戸ではなく、中央部に井戸を持つ井形に区画された耕作地を示すならば、中央部の「・」は井戸を示すこととなろう。その場合、象形文字としては井戸の周囲の地形が井戸を意味するものとなったと理解しうる。しかし、加藤常賢『漢字の起源』は「説文が『井』を『構韓の形』というのは正しい」と断じ³⁵、井田の形象という説を否定している。「構韓」とは、今日一般的に想起される地上構造物の付いたいわゆる井戸である（図2左）³⁶。しかし加藤は同時に『説文』が「・」を釣瓶とする説を林義光の文源に拠り否定している。つまり、加藤の説は井戸構造物（構韓）総体の形状が「・」であり「井」であるという意味となり、同時に両者が存在する字形の説明がつかない。

日本に現存する最古の漢字資料が471年のものとされる稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣の銘で、仏教の公伝が538年とされることから、漢字の普及は早く見積もっても5世紀以降のことと考えられる。宇野隆夫によると「中国では漢代にはすでに、井桁・釣瓶を備えた土製品組の井戸が普及する段階に達してい」た³⁷。一方、（日本の）みどの起源は弥生中期中葉とされ、最早期説を採れば縄文末期である。拠って、筆者は中国に於ける「井」の成立と日本に於ける「井」の「み」への転用の間に断絶があるものと考え、山本博の説に同意する。つまり、筆者は中国に於ける井と日本のみとは実体が異なると考える

のである。区画した平地の中央の取水場を「井」とした中国に対し、日本では地形に関わらず水がある場所を「ゐ」としたのである。取水場を共通の意と捉え、漢字「井」を日本語の「ゐ」に当てたと考えるのが至当であろう。

そこで、中国に於いて「井」が一文字で井戸を表す事実、加えて日本に於いても一文字で井戸を意味し、現代に於いても意味し得ている事実から、「井」を区画地形ではなく井戸構造物であると仮定し論考を進めたい。

まず、井戸の中に在るものとして水が考えうるであろう。藤堂明保『学研漢和大字典』は「井」を「井」と「・」による会意文字とし、「・」を水と説明している³⁸。また、かめ説は、鑿井の際に井底にかめを埋設した中国の風習から考察したものと思われ、一定の説得力を持つが、論者が断定を避けているようである。一方、上田万年他『大字典』は「・」を釣瓶とし、釣瓶が落ちる音を「井」としたとする³⁹。釣瓶説に対し加藤常賢は、これを否定する林義光の『文源』を引き、且つ契・金文にも「・」が無いものがあるとし、林義光の考察を是としている。白川静は「井げたのわくの形」としつつも、卜文・金文による用例を根拠に首枷とし、中央の「・」を人間の頸部であるとしている⁴⁰。

水説は井戸の実態からして説得力があろう。また、発掘調査により古代の井戸からかめ・壺、曲げ物等が発見されている事実から考え、かめ説は一定の説得力を持つ。しかし、それでは何故「井」を「ドン」と音読するのか、藤堂他、井の正字としての「井」と国字としての「井」は無関係とする説は多い一方⁴¹、井戸の中に何らかの物体が落ちる音とする説もあり疑問が残る。また、かめ説によっても音読の説明は困難である。一方、釣瓶説は象形文字としても擬音語としても一定の説得力を持つ。白川の頸説は白川独自の卜占と関連深い甲骨文字研究に基づいており、「井」を首枷とする前提が必須である。しかし井戸を前提に考えると、井戸の中に頸部は考え難い。従って、頸説を採るなら井戸以前に井桁の形状に注視した別系統の解釈となる。

上田万年他『大字典』は「井」の音を「釣瓶が落ちる音」、即ち擬音語としており、筆者も擬音語の可能性はあると考えるが、「釣瓶が落ちる音」には体験的に同意しかねる。筆者が釣瓶説に同意しかねる理由は、井戸に釣瓶を落とした時に発生する衝撃音を「ドン」とは音写し難いと考えからである。秋田裕毅も前書冒頭で幼少時の井戸遊びの爽快感を回想し、「釣瓶を、ガラガラバツシャンと井戸のなかに思い切り落とすときに発する音と水しぶき」と書いている⁴²。また、古代の井戸跡から発見されるかめや壺の中にはその首の部分に縄が巻き付いたものが報告されており、釣瓶として使用されていたものと推定されるが、それらは静かに井戸の中に降ろされたのではなかろうか。割れやすいかめや壺を乱暴に扱うとは考えにくく、着水音が「ドン」とは想像し難い。

原始的な井戸、即ち水面近くまで人が下って水を汲む下り井戸や、湧水或いは流水を汲む施設としての井戸の場合、もしくは諸橋が紹介する『農政全書』の挿絵のような井戸の場合、取水する際は柄杓や容器で直接掬ったり、何らかの器を投入—いわゆる「振り釣

瓶」を使用—して引き上げたりする。それには通常木製の桶のようなものが使用されたと考えうるが、その場合、井戸に桶を投入した際の衝撃音としては「パシャン」「バシャン」等「パ系」或いは「バ系」の擬音語が想起されよう。また、釣瓶式の深井戸に垂直に桶を投入した場合⁴³、桶の大きさ、重さ、また井筒の環境等により衝撃音が反響する可能性はある。「トーン」と「ト系」の擬音語により軽快感を表現することも考えうるが、「パシャーン」、「バシャーン」等、いずれにしても反響音は長音となるだろう。釣瓶が落ちる擬音語としての「ドン」には同意しかねるところである。

4-2 戸

従来の井戸の研究に於いても呼称の所以は論究され、殊に漢字「井」は注目されてきた。一方、「戸」に注目した研究は筆者の知見では無い。その専らの理由は「井」一字のみで井戸を意味しうるからであろう。山本博は「戸」に言及しているが、その意味を蓋し求め、専ら井戸そのものの研究に傾注している。山本が「井戸」の起源を日本と考えている点は前章で述べた通りである。そこで筆者は、日本語の「井戸」に於いては「井」同様に「戸」にも重要な意味が込められているのではないかと考え、語源、国語、古語、漢和の各字典を調査した。

漢字「戸」（と・[国訓：へ]、呉音：グ・ゴ、漢音：こ）。加納はその語源イメージを「出入りを止めて囲い込む」とし、実現される意味を「家屋の出入り口」としており、「と」の意味から「家の意味」への展開を説明している⁴⁴。

一方、講談社『暮らしとことば語源辞典』、三省堂『新明解語源辞典』、東京堂『語源辞典名詞編』、他各書いずれも「井戸」を説明した上で、「ど」は「処」の意としている。中でも三省堂『新明解語源辞典』は「ど」「語形の安定のために添えられたもの」で、「戸」は「当て字である」としている⁴⁵。語源辞典による「井戸」の説明は、概して「戸」には場所、即ち「処」を意味する以外の意味を認めていない。

次に、漢字辞典を確認する。加藤常賢は「戸」を「門の枝折り戸の半分の象形」とし、字音としての「コ」は「護」、即ち、字義を「室を護るものの意」としている⁴⁶。白川静も「戸」を片開きの扉から創作された象形文字としているが、「神を祭る神棚の片開きの扉の形である」と説明し⁴⁷、『字通』では「門戸は内外を分かつ神聖なところ」、部首としては「その戸は神戸棚を示す字」、声系からは「聖所」とであると神聖性を強調している⁴⁸。

加藤説も白川説も漢字の説明としては説得力がある。しかし、どちらも「井戸」の「戸」との関連性は神聖性以外に見出し難い。また、語源辞典にあるよう、「ド」が「処」であるならば、何故るどを「井処」と表記せず「井戸」と書くのか解明されない。

しかし上田万年他『大字典』は、「戸」には第二の意味として「轉じて家屋住居の義」と⁴⁹、即ち「棲家」の意味を載せている。いわゆる「一戸建て」の「戸」、「戸主」の

「戸」である。

以上の「戸」に関する諸説を、実際のみどの発生事情を参照しつつ検討すると、人の棲家に於ける中心的施設とは考えにくい。最初期の土抗は共同体祭祀の目的が指摘されており、江戸時代に至っても各家各家庭に属する井戸は稀であった⁵⁰。弥生時代の環濠集落として知られる池上曾根遺跡には井戸建屋（やよいの大井戸）が復元されているが、建屋に隣接する大型掘建柱建物（いずみの高殿）及び上部に括れある立柱とともに、そこは集落の祭祀性ある共同水場と考えられる。井戸は基本的に共同体のものであったと理解して良い。また、もし人の棲家に付属する井であれば、「井戸」ではなく「戸井」となるのではなかろうか。また、井戸小屋を井屋と言う例はあるが⁵¹、井を持つ家を「井戸」と呼称する例は無い。

そこで筆者は「戸」という漢字を「棲家たるみど」に当てたと考える。しからば、井戸には何が棲んでいると考えるかが問題となろう。実際に井戸の中に棲息する生物としては、人為的に井戸中に放たれた鮒が挙げられる。井戸の中に鮒を放つ事例は多く認められ、水質管理上有効な古来の知恵であるが、水質に対する意識向上が前提となり、比較の後年に起源が求められよう。生物としてはまず、両生類のイモリが挙げられてしかるべきであろう。

イモリは日本固有種で、古くは波紋と共に銅鐸絵画として描かれている⁵²。肩から切断しても指先まで再生されるイモリの驚異的再生能力は古代人にとり神秘であったと想像されるのみならず、今日でも生物学的研究の対象となっており、井戸の持つ神秘性とのイメージ結合は容易に想像される。イモリは漢字で「井守」とも書かれるよう、井戸周囲に棲息するその生物が井戸を守ると想像されたのであろう。

しかし、井戸が存在してこそ「井守」が生まれたのである。「井守」が棲息しているから「井戸」が発生した訳ではない。実際に生物の棲息いかんに関わらず、地下水を溜めて汲み上げる場所である井戸を特定の生物の棲家として認識するには無理がある。

そこで想定されるのは、井戸神、水神、といった民俗信仰のカミである。イモリが「井守」とされるのも両生類としての実体からではなく、神秘性の影響を受けた民俗思考によるものである。即ち、井守は加藤常賢の言う「室を護るものの意」を具現した存在と見做されたと言えよう。考古学者・相原康二は「井戸は異界・冥界への通路」としつつも、「そこには井神が居る」と書いている⁵³。考古学者・田所真も陰陽五行説から遊行神である土公神（どくじん）を説明し「秋には井戸に住んでいる」と書く共に、「井戸に関わりのある神様が、地中深くの世界と地上を行き交うのに、井戸をその通路として使っていると信じられている」と書いている⁵⁴。また、岐阜県埋蔵文化財保護センターの近藤正枝も井戸を「神の住む地下他界への通路であり、神の籠もり場」と捉えている⁵⁵。井戸の神については次章で再度述べるが、井戸の守護神の性格が認められ、祭祀対象となっている点は指摘しておきたい。

5 井戸祭祀と井戸観

遺跡から発見される土坑には概ね以下の六つの可能性がある。即ち、一) 食料貯蔵穴、二) 木器貯蔵穴、三) 廃棄坑、四) 土壙墓の残骸、五) 粘土採掘坑、六) 祭祀土坑、である。しかし秋田裕毅は、一) を高湿度を理由に否定、二) を発掘面積と時代の限定を理由に否定、三) を「あまりにも現代的解釈」と批判しており、筆者も同意するところである⁵⁶。四) 並びに五) の可能性は否定できないが、個別事例に過ぎず一般化できない。秋田は消去法により六) に導き、祭祀土坑に「地下水が湧出」する例がある事実により、祭祀土坑から井戸への発展説を補強している⁵⁷。

日本の井戸の起源を祭祀土坑とするか否かは偏に井戸の定義によるが、早期、おそらくは井戸発生当時から、井戸で祭祀が行われて来たことは通説になっている。

遺跡の発掘を見るに、古代の井戸から齋串や土馬、中世の井戸からは陰陽道の呪札が発見されている⁵⁸。各地方、各年代の井戸遺構から獣骨、土器、木器、曲げ物、陶器、自然石、石像、他それらに墨書されたもの等さまざまな遺物が発見されており、それらの遺物が、開鑿以降のどの時点で井戸内に設置・投入されたかは発掘調査が明らかにするところである⁵⁹。鐘方正樹は井戸祭祀を、井戸構築時（1段階）、井戸使用時（2段階）、井戸埋め戻し時（3段階）と三期に分けてその特徴を論じているが⁶⁰、いずれの段階にせよ、遺物は井戸が祭祀対象であったことを示す物証ともなっている。

井戸祭祀が中国思想の影響を受けつつ変容したことは鐘方が指摘しているが、カミ祀りや仏教と習合し、更には日本独特の「道」思想とも結びついた。殊に鑿井業者、危険な作業に従事する井戸掘り職人による回顧として、「心の浄化として井戸掘りに勝るものはない」のような求道者の如き発言を水みち研究会が記録している⁶¹。

水みち研究会は多摩地域の井戸所有者や鑿井業者を訪問し、個々人の井戸との具体的な接し方を聴取しており、興味深い民俗記録を保存している。例えば、「国立の岩下さん」の日常は、「毎朝、井戸水を汲んで神棚に上げ、仏壇には沸かして上げている。元旦には『井戸神様』とってお酒を井戸にまいている」という⁶²。また「狛江にある谷田部さん」は、「お正月には伊豆美神社の水神様のお札をまつる」とのことである⁶³。同研究会の聞き取り調査は、井戸にまつわる多摩地域の風習や井戸のある家庭に於いて井戸神を祀る習俗が残っていることを記録しているが、谷田部氏の事例にあるよう、一般市民の間では井戸神と水神の区別は意識されていないようである。

元神奈川県教育庁文化財保護主幹・川口謙二は、井戸神を祀る家では「簡単な神棚を作り、水神と書いた紙や板を貼って祀る」「水神の一種である」と書いている⁶⁴。一方、柳田国男は、井戸の守護神として各地方「一般の水神とは異なった信仰を伝えている」と書き、異なる見解を示している⁶⁵。また、鐘方正樹は陰陽五行説など中国思想の影響を指摘し、土の守護神たる土公神（どくじん）が「四季によって居所を変え、春はカマド、夏は

門、秋は井戸、冬は庭に」居ると述べている⁶⁶。

埋戻しは極力避けられ、やむを得ず埋井するにあたっては、巨石や土で嚴重に封じる場合と、節を抜いた竹を刺し「息抜き」をする場合があり、後者の例は今日でも広く知られている⁶⁷。いずれの場合も何らかのカミ的存在が前提の行為であることは論を俟たない。

6 願文石

願文石とは、1994年、東京都青梅市新町二丁目27番地所在の東京都指定史跡「青梅新町の大井戸（おいど）」から出土した重量12kgの丸石である（写真4）⁶⁸。その形状と表面質感から推測し、多摩川河川敷に見られる石英閃緑岩と思われる。青梅市遺跡調査会の調査概報によると、「踊り場から14.5m下」から検出された⁶⁹。当該願文石には墨書銘があり年号部分は釘等により陰刻されている。銘文は「明和七年 かのえとら 壬六月 兀六日 □方之水ハ 永代不絶泉是迄奉□」⁷⁰とあり、明和七年とは、西暦1770年である。大井戸の鑿井年は不詳だが、日本考古学協会会員・伊東博司は墨書銘を開村以前から存在した大井戸で1770年に「井戸浚え」が行われた記録」と見ている⁷¹。



写真4. 願文石

青梅市郷土博物館蔵（2019.12.15.筆者撮影）

「井戸浚え（以下、井戸浚い）」とは「井戸浚い」、「井戸替え」とも言われるいわゆる井戸の大掃除で、江戸時代には七夕とともに7月7日に広く行われた共同体行事である⁷²。通常の井戸浚いは、まず地域住民総出で井戸内の水を全て汲み出す。次に井戸屋と呼ばれる専門の職人が井戸内に入り清掃するのである。井戸浚いは江戸の夏の風物であった。

しかし、明和七年大井戸の井戸浚いは通常の井戸浚いとは大きく異なるものだったのではなからうか。明和7年6月から8月は西暦1770年6月から9月に当たり、全国的に雨が降らず、九州から東北地方まで深刻な凶作と水不足に見舞われた。いわゆる明和の大旱魃で、全国に加持、祈祷の類の記録が残っている。願文石の検出地点、即ち、「踊り場から14.5m下」は井戸底より上75cmで、願文石設置時点で既に75cmの土が堆積していたのである。通常の井戸浚いであれば、何故それほど堆積した土を除去しなかったのか疑

問である。湧水した井戸底部にほぼ地下水は溜まっておらず、或いは堆積した土は固く乾燥していた可能性もある。当時の状況から当該井戸浚いに於ける地下水位上昇の危険は考え難く、井戸底に下りずに開口部から願文石を投入したとは考えにくい。井戸底上 75cm 地点を井戸底と誤認したのではあるまいか。

筆者は願文石の設置を井戸祭祀のひとつと考えており、祭祀を行うにあたって井戸の清掃は必至であろう。従って、伊東が述べるよう、井戸浚いの記録という側面は確かに認められる。しかし、「願文石」と命名されたよう、記録である以上に、カミに対する祈願、祈祷の証明と理解すべきではなかろうか。

7 御嶽神社境内の新町水神社（水神宮）と安置品

1616（元和2）年の開村時新町村と号した青梅市新町は、北方を西から東に流れる霞川まで約 1.5km、南方を同じく東流する多摩川まで約 2km の台地上に位置する。元来水を得にくい土地であり、地域の開墾の嚆矢となったのが、新町一丁目 21 番地、東京都指定有形文化財・旧吉野家住宅敷地内に現存する吉野家の井戸である。1613（慶長 18）年に、まずこの吉野織部之助の井戸、次に宮寺次郎右衛門の井戸が鑿井されている⁷³。翌年には塩野仁左衛門の井戸、1618（元和4）年に嶋田勘解由左衛門の井戸と陣屋の井戸が掘られている⁷⁴。これらの井戸を始めとし、順次、旧箱根道（現・新青梅街道）沿いの屋敷内外に井戸が設けられた。大井戸は、南北朝から室町時代に属する出土品により、開村以前に存在していたと考えられ、塩野家の井戸とは大井戸を改修工事したものと推定されている⁷⁵。

同地域では、1977 年の新青梅街道拡幅工事を前に、街道沿いの複数の井戸が埋められることとなった。それを契機に 1975 年 2 月 8 日、埋井の会が発足、「各井戸の水神の霊を末社に祭り込む」ことを決定したことから新町水神宮の創設に至った⁷⁶。同月 25 日には水神をお祭りする水神宮鎮座祭が斎行され、翌 3 月 1 日、各井戸神遷霊祭が執行された上で合祀祭が執り行われた⁷⁷。同水神宮は、青梅市新町二丁目 28 番地所在の御嶽神社境内に鎮座するが⁷⁸、御嶽神社は開村にあたり、1616（元和2）年 9 月、吉野家の氏神・蔵王大権現を鎮守神として吉野家の鬼門に当たる丑寅（北東）に祀ったことに始まる⁷⁹。

宮川直明御嶽神社第 15 代宮司の許可の下、2020 年 10 月、筆者は新町水神社を調査し、社殿回廊東縁下部に 10 点の井戸祭祀関連品を発見した（写真 5、6）⁸⁰。同宮司によると、青梅市水道局より持ち込まれた金属像④以外はすべて埋井された井戸に関する物で、水に係る霊を一旦鎮める為に安置しているが、詳細不明とのことである⁸¹。④を除いた 9 点の内、①御幣（及び御幣立て）、⑤石彫の稻荷神狐像、⑥その神名「正一位稻荷大明神」木札の 3 点は、その材質及び宗教的性格を考慮すると、井戸内部より検出されたとは考え難い。しかし他の 6 点は井戸内部、或いは「井戸」と認識される範囲内の場所

から水神社に持ち込まれたものと推察される。

殊に、⑦大石（22.6kg 片麻岩か）⑧丸石（2.23kg 閃緑岩か）⑨丸石（2.52kg 閃緑岩か）については井戸内部（井筒内）から発見されたとする宮川宮司の証言を得た⁸²。

②男根形状の石（3.33kg 片麻岩か）と③石彫蛙像（0.35kg 砥石か）が井戸のどの部分から発見されたのかは不明であったが、男根形状や丸形の石が井戸内から検出される事例は多く報告されており、陰陽思想の影響と理解されている。即ち、渇水期に陰たる井戸に陽たる男根或いは丸形の石を入れ、祈念することにより、井戸機能の回復を祈願したのである⁸³。また、石の他、檜扇や扇など棒状の物が陽物として検出された事例が報告されている⁸⁴。一方、井戸が廃棄される場合は壺や瓶が埋納される傾向が強いという指摘がある⁸⁵。

③石彫蛙像が井戸本体の周囲に設置されていた可能性は否定できない。しかし、底部の欠損から、筆者は意図的に割った土器や陶磁器の祭祀性ある投入行為との類似性を見出す。いずれにせよ、「井戸」から持ち込まれたこれらの物は自然現象により水を得ることを祈願した証拠と考えられ、前章の願文石と同一性質の物である。

願文石の重量が12.0kgであるのに対し、大石のそれは22.6kgであり、底部には人為的に切削したと思われる窪みが認められる。大石の井戸底に設置した状況を擬態語で表現するなら「ドン」が相応と思われる。



写真 5. 新町水神社社殿と安置品

新町水神社社殿回廊東縁部下の安置品発見状況

社殿北（写真右端）に埋井之碑が見える。（2020.10.21. 筆者撮影）



写真 6. 新町水神社社殿前の安置品

上段左から①御幣（及び御幣立て）、②男根形状石、③石彫蛙像、奥④金属像、前⑤稲荷神狐像と⑥神名木札（下段右奥）、下段左から⑦大石、⑧丸石、⑨丸石、⑩神名銘石版

実際の安置状況の位置関係を社殿前に再現した。（2020.10.21.筆者撮影）

8 結論

本研究は、本来「みど」と呼称された井戸の実態と漢字「井戸」を照合した。それにより以下の点が明らかになった。即ち、祭祀目的に掘削された豎穴が、深度を深め地下水脈に到達することによりみどが発生した。即ち、水が「み」る場所の発見である。次第にみどは地下水を得る目的で掘削されるようになった。

漢字「井」の中国に於ける成立事情には諸説あるが、順序としては「井」から「井」となった。日本では、みどの「み」に既に「井」として中国で定着していた漢字「井」が当てられたのである。みどはカミの通路、或いはカミが居住する場所と認識された為、みどの「ど」には居住場所を意味し、神聖性を帯びた「戸」が当てられたと推定する。加藤常賢、白川静共に「戸」に神聖性を認めるところである。

漢字「井」の正字としての「井」と国字としての「井」は別物であり、その成立には時

間的断絶があるが、井戸概念を通して連続性が認められる。即ち、井壁の崩壊防止の為に井桁状の枠が組まれるようになり、地下水を溜めて取水する場所という意味とその形状から、「ゐ」に漢字「井」が当てられたと考えられる。しかし、井戸涸れ等何らかの問題が発生した場合、相原康二などが指摘するよう、井戸中に男根形状の石、丸形の等が設置・投入され、井戸の再生が祈願された。筆者は「願文石」と前章で紹介した新町水神社安置の石はその類例であると考え。井戸再生祈願の際、井戸内部に水は殆ど無い筈である。従って、「ドブン」、「ドボン」、といった擬音語で表記されるような音の発生は想像し難く、井底が乾燥した状態のところを石を落下させた場合に限り、擬音語「ドン」に近い音が発生したとは考えうる。しかし、これらの石の祭祀性を考慮すると、地上から井戸底へ投入、落下させたとは考え難い。拠って、筆者は質量ある石の設置状況を擬態語「ドン」で表現したものと推定する。無論、使用中の井戸にむやみに石を投入する行為は実用性からも不合理であり、それが字形になったとは考え難い。いずれにせよ、井戸から発生した国字「井」の最終画の「丶」は祭祀性のある石を表すものと解釈すべきではなかろうか。

9 おわりに

本年度のサマーコース、IUC Summar 2021 に於けるクラブ活動、「多摩クラブ」に於いては多摩地区の井戸と養蚕を扱う機会に恵まれたが、取材と映像教材の制作を通じ、期せずして井戸、養蚕、そしてセンターの所在地横浜が繋がった。

多摩地区は台地、丘陵、山地の占める割合が高く、西部は特に河川の水を得にくい地勢である。そこで鑿井が地域の開墾に重要であったのだが、多摩の地勢的特性は大規模な水田耕作には不向きであった。昭和初期までの多摩地区は桑畑が広がり、近代日本の基幹産業のひとつである養蚕業が盛んで、生産された生糸は、「絹の道」を通り横浜港へ運ばれ、欧州へ輸出されていたのである。「絹の道」沿いには井戸（跡）が確認できる。

2021年8月に水神社を再訪したところ、安置品①の御幣及び御幣立てが確認できなかった。資料の散逸を危惧するところである。本稿末に「新町水神社社殿回廊東縁下安置品一覧」を付し今後の研究に供したい。

末筆ながら調査と取材にご協力くださった青梅市郷土博物館、新町 御嶽神社、東京都西多摩建設事所、臨済宗建長寺派 寶珠山 地藏院、及び地域の方々に謝意を表したい。

注

- 1 2021年4月19日、谷口廣之「平家落人伝説と物語」を使用。
- 2 横浜市ホームページ「災害時等の衛生対策に関する情報」2021年6月7日

- <https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/sumai-kurashi/seikatsu/kaiteki/saigai.html#saigaiido> (2021.6.14 閲覧)、尚、表示としては「災害用井戸」とされている。
- 3 (参考) 星井麻紀 (2012)「大道小のトンボ池」朝日新聞デジタル 2012年4月5日 <http://www.asahi.com/area/kanagawa/articles/MTW20120405150230001.html> (2020.3.11 閲覧)
- 4 横浜市の井戸新設はその後も継続し、2019年には同市中区の小学校の校庭にも災害応急用井戸が新設されている。(参考) カナコロ神奈川新聞「連携へ井戸引き渡し横浜」2019年2月8日 17:00 <https://www.kanaloco.jp/news/life/entry-148899.html>
- 5 地質調査所技官の蔵田延男は日本の代表的な井戸として「滑車のついている縄つるべ井戸」を挙げている。井戸の形式呼称は統一されておらず、研究者により異なる。例えば「滑車のついている縄つるべ井戸」は「車井戸」或いは単に「つるべ井戸」と呼称されることが多いが、岡田静雄は「撥ね釣瓶井戸」の図説に「つるべ井戸」と書いている。<http://www.jgwater.or.jp> (2021.5.11 閲覧) また、じくろ井戸と車井戸の混同も散見される。
- 6 手動ポンプの井戸は「閉鎖式」といい、昭和初期に衛生対策として開発された。(参考) 堀越正雄 (1981)『井戸と水道の話』論創社
- 7 比定地の一つである埼玉県狭山市堀兼所在の堀兼神社境内「堀兼の井」、堀削困難な井戸という意味の一般名詞と仮定しても、同市北入曾所在の「七曲井」も降り井である。特に後者の急角度の西側法面は金属網による保護措置がとられており、地盤の脆さが容易に推察される。
- 8 井戸の深度が深まるにつれ揚水器具も変化し、深深度から大量に揚水するじくろ井戸では、現代で言うところのウインチが使用された。
- 9 筆者下線。新村出編 (2018)『広辞苑』(7版) 岩波書店 p.192
- 10 梅棹忠夫他監修 (1989)『日本語大辞典』講談社 p.127
- 11 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1999)『角川古語大辞典』第5巻 角川書店 p.1032
- 12 秋田裕毅 (2010)『井戸』法政大学出版局 pp.1-2、(参考) 堀大介 (1999)「井戸の成立とその背景」古代学研究会 (1999)『古代学研究』第146号
- 13 前掲書 p.39 同書で秋田は井戸を定義し「もっぱら日常生活に用いる水を得るために開鑿・建造された施設」と書いている。p.xi
- 14 山本博 (1970)『井戸の研究』綜芸舎 p.8
- 15 上水井戸は、明治時代には「水道井」と呼称されている。(参考) 堀越前掲書
- 16 更に言えば、液体とは無関係のガス井や地殻調査井もある。
- 17 水みち研究会 (1998)『井戸と水みち』北斗出版 p.74

- 18 筆者下線。増井金典 (2010) 『日本語源広辞典』 ミネルヴァ書房 p.72
- 19 井戸の各部位の名称は統一されておらず、研究者により異なるが、地上部分を井桁と呼称する点は共通している。山本博は地上施設を「井戸側」、地下施設を「井筒」と呼称する。宇野隆夫は地下の壁状構造物を「井筒」と呼称することに対し、形状が必ずしも「筒」ではない事を理由に異を唱え、「井戸側」としている。鐘方正樹は地下構造物を「井戸枠」、地上部分を「井桁」と呼称している。一方、『造園用語辞典』では地上部分を「井筒」としている。
- 20 山本博 (1970) 『井戸の研究』 綜芸舎
- 21 倉野憲司校注 (1963) 『古事記』 岩波書店
- 22 (参考) 三浦佑之 (2019) 『古事記神話入門』 文藝春秋他
- 23 加納喜光 (2014) 『漢字語源語義辞典』 東京堂出版 p.726
- 24 山本前掲書 p.8
- 25 東京国立博物館画像検索 (国宝)
- <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0017686> (模本)
- <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0018938> (2021.5.18 閲覧)
- 26 上田正昭監修・編集 (2006) 『日本古代史大辞典』 大和書房：「井」：「地下水を汲む施設。井戸ともいう (勝田至)」、小松寿夫・鈴木英夫編 (2011) 『新明解語源辞典』 三省堂：「本来『井』だけで、『井戸』の意を表した」他。
- 27 筆者原注。
- 28 「ゐ」を「集る」とする定説に対し、清水康行ほかから古代のイントネーションとの相違の指摘がある。
- 29 上田万年他編 (1964) 『大字典』 (特装版) 講談社
- 30 石材の割り抜き井桁も存在し、必ずしも組み合わせた構造を採るわけではない。
- 31 城南山人編 (1998) 『篆書字典：説文解字』 木耳社、p.9
- 32 (参考) 加納前掲書 p.726、藤堂明保 (1978) 『学研漢和大字典』 学習研究社 p.38
- 33 尾崎雄二郎他編 (1992) 『大字典』 角川書店 p.63
- 34 鎌田正・米山寅次郎 (2011) 『新漢語林 第二版』 大修館書店 p.62
- 35 加藤常賢 (1970) 『漢字の起源』 角川書店 p.596
- 36 『和漢三才圖會』は「幹」と「韓」を同じとしている。
- 37 宇野隆夫 (1992) 「井戸考」 京都大学 p.18 https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/238690/1/shirin_065_5_623.pdf (2021.6.12 閲覧)
- 38 藤堂前掲書
- 39 上田万年他前掲書
- 40 白川静 (1984) 『字統』 平凡社 p.492、同 (1996) 『字通』 平凡社 pp.892-893

- 41 藤堂前掲書 尚、近年は「井」を「半国字」とし、井の正字との連続性を示唆する解説が出ている。
- 42 秋田前掲書 iv
- 43 深度約 20~25m を境界に「浅井戸」と「深井戸」分けられているが、それぞれ一般語であり、明確な定義は無い。
- 44 加納前掲書 p.374
- 45 小松寿雄・鈴木英夫編『新明解語源辞典』三省堂、2011年、p.85 尚、増井金典『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房、2010年は「井戸は当て字と思われます」と書いている。
- 46 加藤前掲書 p.390
- 47 白川静(2012)『常用字解』(第2版)平凡社 p.193
- 48 白川前掲『字通』平凡社 p.162
- 49 上田万年他前掲書
- 50 江戸市中の上水井戸は公共施設であった。また、特定の屋敷内の井戸の場合、土地所有者が屋敷の戸主で井戸所有者が屋敷戸主を含めた共同体各戸主の例が認められる。
- 51 天台寺門宗総本山園城寺(三井寺)の闕伽井屋など。
- 52 (参考) 桑原久男(2020)「銅鐸と弥生土器の図像表現は可視化された『神話』か?」『万葉古代学研究年報』第18号
http://www.manyo.jp/ancient/report/pdf/report18_12_dotaku.pdf
 (2021.6.12 閲覧)
- 53 相原康二(2018)「館長室から#48 弥生 考古学から平泉文化を考える③日本考古学への貢献一呪いの考古学②」えさし郷土文化館
<https://www.esashi-iwate.gr.jp/bunka/column/48-弥生%E3%80%80考古学から平泉文化を考える③-日本考古/>
 (2021.5.18 閲覧)
- 54 田所真「『土公神』を井戸に封じ込めた遺跡」市原市埋蔵文化財調査センター
<https://www.city.ichihara.chiba.jp/maibun/note/notebook20.htm>
 (2021.6.12 閲覧)
- 55 近藤正枝「扇出土遺跡の性格と扇を使用する祭祀について」岐阜県教育文化財保護センターp.19
<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/92716.pdf> (2021.6.12 閲覧)
- 56 秋田前掲書 p.61
- 57 秋田前掲書 p.64
- 58 相原康二は岩手県柳之御所遺跡の出土品から京都同様の呪性を指摘、男根形が全国の井戸遺跡から出土する例が多い理由を陰陽二分の思想で説明している。(参考) 福田

- アジオ他 (1999) 『日本民俗大辞典』 吉川弘文館 (参考) 相原前傾文 (2021.5.18 閲覧)
- 59 (参考) 新名強は、齋宮跡の 5 箇所井戸跡より出土した齋串、銅製儀鏡、墨書土器、木製横櫛等から、齋宮内で井戸に関わる祭祀が行われていたと推察している。
<http://www.book-stack.com/browsing/aj201105t.pdf> (2021.5.18 閲覧)
- 60 鐘方正樹 (2003) 『井戸の考古学』 同成社
- 61 水みち研究会前掲書 p.37
- 62 前掲書 p.14
- 63 前掲書 p.25
- 64 川口謙二 (1999) 『日本の神様読み解き辞典』 柏書房 p.250
- 65 柳田国男 (2018) 『祭祀習俗辞典』 河出書房新社 p.462 (柳田国男 (1964) 『分類祭祀習俗語彙』 角川書店の改題復刊)
- 66 鐘方前掲書 p.155
- 67 前者の事例は千葉県市原市所在の池ノ谷遺跡他多数で確認され、後者の事例は鑿井、水道、建設、宗教関係者がもはや慣習のように紹介している。
- 68 筆者原注。青梅市遺跡調査会による記録上の所在地は青梅市新町字宮の前 455 番地である。1993 年 3 月 22 日、東京都指定史跡に指定された。
- 69 青梅市遺跡調査会 (1994) 『東京都史跡 青梅新町の大井戸発掘調査概報』 p.15
- 70 青梅市遺跡調査会及び青梅市教育委員会は、□を「地」及び「る」と推定している。
- 71 伊東博司 (2003) 「『青梅新町の大井戸』の構造について」たましん地域文化財団「多摩のあゆみ」111 号 pp.42-53
- 72 明治時代には七月七日に行う習慣は厳密には守られていなかった。(参考) 堀越前掲書。
- 73 (参考) 吉野織部之助 (1611) 『仁君開村記』 記念誌新町編集委員会『新町御嶽神社史三七〇年記念誌』 御嶽神社鎮座三百七十年記念事業奉賛会 pp.271-279
- 74 同上
- 75 (参考) 青梅市遺跡調査会編前掲書
- 76 宮川淳 (1992) 「御嶽神社」 記念誌新町編集委員会『新町御嶽神社史三七〇年記念誌』 御嶽神社鎮座三百七十年記念事業奉賛会 p.229
- 77 前掲書 p.230 埋井された井戸数は 9 基。
- 78 御岳山に鎮座の武蔵御嶽神社に対し、新町に鎮座の御嶽神社は「新町御嶽神社」と通称される。
- 79 (参考) 前掲書 pp.191-238、青梅市郷土資料室編前掲書 pp.63-65
- 80 社殿脇に立つ平成 11 年 9 月付由緒書きでは「新町水神社」となっている。呼称としては「水神宮」、「水神社」、いずれも使用している (宮川宮司)。

- 81 金属像は、水道工事に使用した余剰材料で作られている（宮川宮司）。
- 82 名称は全て筆者命名。⑩は銘文「日天・月天・妙法守護・金神・水神」。
- 83 （参考）相原前掲文
- 84 （参考）近藤前掲論文
- 85 （参考）久世康博「井戸はどうして埋められたのか（土器を入れる）」京都大学

新町水神社社殿回廊東縁下安置品一覧

名称	材質	寸法 cm	重量 kg	備考
①御幣（及び御幣立て）	紙、竹（木）	最大高 28.5（御幣立て含）	—	
②男根形状石	石	最大高 18.0 最上部周 37.0 くびれ部周 32.0 最下部周 38.0	3.33	石質は片麻岩か。
③石彫蛙像	石	最大高 7.0 最大長 9.8 最大幅 6.5	0.35	石質は砥石か。
④金属像	鉄等	最大高 79.0 台座部 34.5x12.0x4.0	27.33	上部と台座は一体。溶解した金属資材を流し固めたものと思われる。赤錆あり。
⑤稻荷神狐像	石	最大高 15.0 最大長 25.0 最大幅 8.0	2.20	石質は砂岩か。
⑥神名木札	木	31.0x10.4x4.5	0.40	表：奉納 正一位稻荷大明神 裏：昭和四十六年二月一日 一金（金額）圓也石上寿郎 基礎工事 一金（金額）圓也築地清○ 一金（金額）圓也築地章二郎
⑦大石	石	最大周 84.0	22.60	石質は片麻岩か。
⑧丸石	石	最大周 43.0	2.23	石質は閃緑岩か。
⑨丸石	石	最大周 43.0	2.53	石質は閃緑岩か。
⑩神名銘石版	石	最長辺 53.0	6.73	銘：日天・月天・妙法守護・ 金神・水神 石質は砂岩か。

備考欄○はさんずいに名

参考文献

著書・著述

- 秋田裕毅 (2010) 『井戸』 法政大学出版局
- 伊東博司 (2003) 「『青梅新町の大井戸』の構造について」 たましん地域文化財団「多摩のあゆみ」111号 pp.42-53
- 青梅市遺跡調査会編 (1994) 『東京都史跡青梅新町の大井戸発掘調査概報』 青梅市遺跡調査会
- 青梅市郷土資料室編 (2003) 『青梅市史史料集第五十一号『仁君開村記』による新町村開拓 上成木・小山家文書目録』
- 記念誌新町編集委員会 (1992) 『新町御嶽神社史三七〇年記念誌』 御嶽神社鎮座三百七十年記念事業奉賛会
- 宇野隆夫 (1982) 「井戸考」 京都大学
- 鐘方正樹 (2003) 『井戸の考古学』 同成社
- 藏田延男 (1951) 「日本の井戸とその歴史」 『地学雑誌』 1951年、60巻4号 (第682号) pp.183-190
- 倉野憲司校注 (1963) 『古事記』 岩波書店
- 堀大介 (1999) 「井戸の成立とその背景」 古代學研究會 (1999) 『古代学研究』 第146号
- 堀越正雄 (1981) 『井戸と水道の話』 論創社
- 三浦佑之 (2019) 『古事記神話入門』 文藝春秋
- 水みち研究会 (1998) 『井戸と水みち』 北斗出版
- 宮川淳 (1992) 「御嶽神社」 記念誌新町編集委員会 『新町御嶽神社史三七〇年記念誌』 御嶽神社鎮座三百七十年記念事業奉賛会 p.229
- 山本博 (1970) 『井戸の研究』 綜芸舎
- 吉野織部之助 (1611) 『仁君開村記』 記念誌新町編集委員会 『新町御嶽神社史三七〇年記念誌』 御嶽神社鎮座三百七十年記念事業奉賛会 pp.271-279
- 若林直樹 (2017) 『井戸を掘る 命をつなぐ』 ダイヤモンド社

辞書・辞典

- 上田万年他編 (1964) 『大字典』 (特装版) 講談社
- 上田正昭監修・編集 (2006) 『日本古代史大辞典』 大和書房
- 尾崎雄二郎他編 (1992) 『大字典』 角川書店
- 梅棹忠夫他監修 (1989) 『日本語大辞典』 講談社
- 加納喜光 (2014) 『漢字語源語義辞典』 東京堂出版
- 鎌田正・米山寅次郎 (2011) 『新漢語林 第二版』 大修館書店

- 川口謙二 (1999) 『日本の神様読み解き辞典』 柏書房
小松寿夫・鈴木英夫編 (2011) 『新明解語源辞典』 三省堂
白川静 (1996) 『字通』 平凡社
白川静 (1984) 『字統』 平凡社
白川静 (2012) 『常用字解』 (2版) 平凡社
新村出編 (2018) 『広辞苑』 (7版) 岩波書店
城南山人編 (1998) 『篆書字典：説文解字』 木耳社
寺島良安 (1970) 『和漢三才圖會』 東京美術
東京農業大学編 (2011) 『造園用語辞典』 (3版) 彰国社
藤堂明保 (1978) 『学研漢和大字典』 学習研究社
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 (1999) 『角川古語大辞典』 角川書店
福田アジオ他 (1999) 『日本民俗大辞典』 吉川弘文館
増井金典 (2010) 『日本語源広辞典』 ミネルヴァ書房
諸橋轍次 (1957) 『大漢和辞典』 大修館書店
柳田国男 (2018) 『祭祀習俗辞典』 河出書房新社

インターネット上の資料

- 相原康二 (2018) 「館長室から#48 弥生 考古学から平泉文化を考える^㉞日本考古学への
貢献一呪いの考古学^㉞」 えさし郷土文化館
[https://www.esashi-iwate.gr.jp/bunka/column/48-弥生%E3%80%80考古学から平泉文化を考える^㉞-日本考古/](https://www.esashi-iwate.gr.jp/bunka/column/48-弥生%E3%80%80考古学から平泉文化を考える㉞-日本考古/) (2021.5.18 閲覧)
- 宇野隆夫 (1992) 「井戸考」 京都大学
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/238690/1/shirin_065_5_623.pdf
(2021.6.12 閲覧)
- カナコロ神奈川新聞「連携へ井戸引き渡し 横浜」2019年2月8日 17:00
<https://www.kanaloco.jp/news/life/entry-148899.html> (2020.3.11 閲覧)
- 久世康博「井戸はどうして埋められたのか(土器を入れる)」京都大学
<https://www.kyoto-arc.or.jp/News/kenkyu/07kiyou-06.pdf> (2021.6.12 閲覧)
- 桑原久男 (2020) 「銅鐸と弥生土器の図像表現は可視化された『神話』か?」『万葉古代
学研究年報』第18号
http://www.manyo.jp/ancient/report/pdf/report18_12_dotaku.pdf
(2021.6.12 閲覧)
- 近藤正枝「扇出土遺跡の性格と扇を使用する祭祀について」岐阜県教育文化財保護センタ
ー <https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/92716.pdf>

(2021.6.12 閲覧)

新名強 (2101) 「齋宮跡の祭祀遺構と遺物」 『月刊考古学ジャーナル』 第 613 号

<http://www.book-stack.com/browsing/aj201105t.pdf> (2021.5.11 閲覧)

田所真 「『土公神』を井戸に封じ込めた遺跡」 市原市埋蔵文化財調査センター

<https://www.city.ichihara.chiba.jp/maibun/note/notebook20.htm>

(2021.6.12 閲覧)

地下水技術協会ホームページ「地下水技術」

<http://www.jgwater.or.jp> (2021.5.11 閲覧)

東京国立博物館画像検索 (国宝)

<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0017686> (模本)

<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0018938> (2021.5.18 閲覧)

星井麻紀 (2012) 「大道小のトンボ池」 朝日新聞デジタル 2012 年 4 月 5 日

<http://www.asahi.com/area/kanagawa/articles/MTW20120405150230001.htm>

[1](#) (2020.3.11 閲覧)

横浜市ホームページ「災害時等の衛生対策に関する情報」 2019 年 10 月 29 日

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/sumai-kurashi/seikatsu/kaiteki/saigai.html#saigaiid> (2020.3.11 閲覧)

協力

青梅市郷土博物館

新町 御嶽神社

東京都西多摩建設事務所

臨済宗建長寺派 寶珠山 地藏院